



沖縄の海

投資信託協会
会長

松谷 博司

「おかえりなさい！」——。そう言って迎えてくれる沖縄のダイビングショップの仲間の明るい声。だが、この2年、コロナ禍でその声を聞けていない。

15年ほど前にスキューバダイビングのライセンスを取得した。当時は毎週末のようにお客様と接待ゴルフの生活だったが、仕事を断ち切り、リフレッシュするために“非日常的”なことを、と始めたのがダイビングだった。

かつては少し長めの休暇が取れると沖縄や海外にも行っていたが、この2年はもっぱら、東京近郊の伊豆だ。ヒラメやイシダイのように馴染みの魚のほか、ここは南国かと思うほど色鮮やかなキンギョハナダイ、ソラスズメダイに囲まれ、水深15メートルくらいの異空間を満喫する。季節によって、イカの産卵などに遭遇すると海の中で人知れず肅々と健気に生き抜く彼らに心癒されるものだ。

あれは、ライセンスを取りたての頃だっただろうか。70代半ばとみられるウエットスーツ姿の夫婦が、潜る時間までデッキチェアでゆったりと休んでいる姿が、やたらとカッコ良く、自分もそうなれたら良いなと憧れたのを思い出す。

自分も長く続けるために筋トレを始めた。在宅勤務が増え運動不足を感じていたが、浜から歩いて海中に潜るダイビングでは、器材およそ20キロ

を自分で背負い、浜から海へ、歩を進めなければならぬ。意外と重労働だ。以前は何ともなかったが、久しぶりだと砂や岩場に足が取ら



れ、フラフラするではないか。「決してトシのせいではない！」と言い聞かせるためにも、体幹を中心に鍛えることにした。その甲斐あってか、器材の重みを感じながらもしっかり歩けるし、水中で重要なスキルともいわれる「中性浮力」（水中で浮きも沈みもしない状態）も取りやすくなった。

海近くの定食屋でカサゴの素揚げを注文しては、「さっき岩場に俺さま顔で佇んでいたな」とふと思出すのも近海の良さだ。伊豆もいい。だが、沖縄の、あのどこまでも透明な海と、サンゴ礁に群れるカラフルな魚たちにやっぱり会いたい！そして、一緒に潜った後に恒例の、仲間の経営する焼肉屋さんで皆とアグー豚を食したい。おりしも今年は沖縄の本土復帰50年。一日も早く世界の人々に平和が訪れ、それぞれの日常が戻ることを祈りつつ、沖縄の仲間に「ただいま！」と言える日を待ちわびている。